これが日本社会の現実

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

つれづれなるままに、現在の日本を睥睨（へいげい）すれば、すべての分野（国、企業、個人等の中）で不正や理不尽なことが蔓延跋扈（まんえんぱっこ）し、ネガティブな文化を醸成定着させてしまっているようです。

特に他人の目がない（届かない）ところでは何をしてもかまわない（お天道様はみているぞ、星はなんでも知っているなどすべてお見通しなのに）という愚劣極まる思想ではなく「死想」や概念ではなく「害念」が横行しています。究極の故（ゆえ）は金（カネ）に通じる話なのではないでしょうか。「以我説」（自分さえよければ他人はどうでもよいとする極端な思想）が跳梁（ちょうりょう）しているようです。

東芝の企業業績に対する不正粉飾、化血研の40年間に及ぶ不正隠蔽問題、我が子に対する苛烈な暴行虐待、老人の介護に関連する陰湿な虐待、こども間の集団かつ陰湿ないじめ問題、産廃業者の廃棄食品横流しによる不正利益問題、高速バスの安全不正による前途ある若者の突然の人生の幕引き、国家の運営を担う枢要（すうよう）な大臣から地方の号泣議員に至るまでの何たるさま、あまつさえ五輪（オリンピック）ならぬ汚辱（おじょく）まみれのエンブレム問題や競技場建築問題を小生は併せて「汚リンピック」問題と、あえて言わせてもらいますが、列挙にいとまがありません。

論語の「独を慎め（つつしめ）」、いわゆる慎独（しんどく）という言葉、「邦（くに）に道がない」という言葉、孟子の「人皆人に忍びざるの心あり」（惻隠（そくいん）のころ）、「仰ぎて天に愧（は）じず、俯して人に慙（は）じざるは二の楽しみなり」（二楽）という言葉、楊震の「天知る。地知る。我知る。子（なんじ）知る。誰も知らないとどうしていえるのか。」（四知（しち））という言葉などは絶命し死語になってしまったのでしょうか。これらの言葉を今一度顧みる必要があるのではなかろうかと思えます。

以上の次第でありまして、川上の嘆（せんじょうのたん）「曰く、不正・不義をなす輩はかくのごときか。昼夜を舍（お）かず、何処（どこ）を問わず。」かなであります。

平成28年1月23日 雪がしんしんと落ちるをみる日

(注)

睥睨（へいげい）： 睨み（みらみ）つけること

跋扈（ばっこ）： 我が物顔で振る舞うこと

故（ゆえ）： 理由

跳梁（ちょうりょう）： のさばりはびこること

枢要（すうよう）： 最も重要であること

汚辱（おじょく）： 名誉などを汚される（けがされる）ことによる辱め（はずかしめ）

慎独（しんどく）： 自分一人のときでも身を慎み、道はずれないようにすること

邦（くに）に道がない： 国が乱れていること

忍びざるのころ： 思いやりのころ

惻隠（そくいん）： 哀れに思う気持ち

君子に三樂あり： 君子には三つの楽しみがある

第一の楽しみは、父母共に生存し、兄弟に不幸がないこと

第二の楽しみは、上を向いて天に恥じず下を向いて人に恥じないこと（潔白であること）

第三の楽しみは、優れた才能の持ち主を弟子に持って教育すること

そして、天下で王になることは、楽しみには入らない

四知（しち）： 悪事や不正は必ず発覚する

誰も知らないと思っても、みんな（天、地、自分、相手）が知っている

川上の嘆（せんじょうのたん）： 川の水と同じで二度と元には戻らない

過ぎ去った時間への嘆き